

胆管がん治療まずは手術

大阪市の印刷会社の元従業員らが発症したことで、注目を浴びた胆管がん。原因とみられる化学物質だけでなく、胆管の炎症など様々な原因で発症し、年に約1万3千人が亡くなっている。治療法が限られるため、腹部の超音波検査や血液検査で早期発見することが重要だ。

高齢者多く原因様々

今年5月、大阪市の印刷会社に勤めていた20〜40代の元従業員らが胆管がんを発症していたことが発覚した。発症率がかなり高く、印刷機器の洗浄剤に含まれる2種類の化学物質による

胆管がんとは

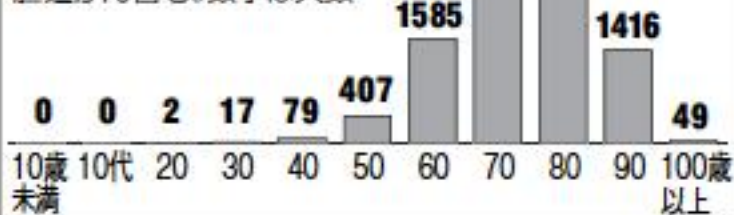


自覚症状

- 黄疸
- 白色の便
- 茶褐色の尿
- 上腹部の痛み

胆管がんの年代別死亡者数

2010年人口動態統計。肝臓内の胆管がんは含まず。部位不明の胆道がん含む。数字は人数



国の統計では、肝臓内の胆管にできるがんを含めた胆管がんの死亡者は2010年に約1万3千人。藤田保健衛生大の堀口明彦教授（胆臓外科）によると、膵管と胆管の奇形を伴った先天性胆道拡張症や、肝臓内の胆管に結石ができる肝内結石症などの患者が発症しやすいという。患者の多くは60代以上だ。化学物質による影響はこれまで知られていなかった。

東京都内に住む女性(77)は02年秋、発熱と食欲がない日々が続き、しばらくすると、黄疸が出た。胆管がんと診断され、「手術はできません。長くて1年で」と言われた。

放射線治療も効果はなく、吐き気などの副作用が続いた。90近くあった体重は約20%も減った。

家族の勧めで、胆管がん治療の実績がある宮崎勝・千葉大病院長にみてもらった。肝臓内の胆管にも広がっていたが、宮崎さんが手術で、がん細胞を取り除い

た。女性は約1カ月後には自宅で普通の食事をし、自営の仕事をして座ることができるまで、本当に驚きました」。

超音波あて早期発見

胆管がんの治療法は手術だ。ただ、がんの場所により肝臓を半分以上とる必要があり、がん細胞をとりきるのも難しい。抗がん剤や放射線による治療は術後か、切除できない場合に限られる。黄疸などの自覚症

状が出る頃には、リンパ節や他の臓器に転移していることも多いという。腹部の超音波検査では、がんによって胆汁の流れが滞って、胆管が太くなり、異変が見つかることもある。血液検査で、ALP

(アルカリホスファターゼ)という酵素の値が高ければ、胆汁の流れの滞りを疑う手がかりにもなる。

千葉大病院は、がんが広がった患者でも、抗がん剤で小さくしてから手術を試みている。患者22人のうち8人ががんの縮小がみられ、切除できたという。

宮崎さんは「これまで治療をあきらめざるを得なかった患者さんにも手術ができるよう、研究を進めた」と話す。(南宏美)